

ワークショップ II

障害児における機能的言語行動の成立条件

－ 実験室的研究の成果と今後の課題 －

企画・司会：加藤哲文（土浦短期大学）

話題 提供：松岡勝彦（筑波大学大学院）・井上雅彦（兵庫教育大学）

これまでに、障害児に対して様々な訓練プログラムや訓練技法が開発・実践されてきたが、とりわけ、言語行動に着目した研究が質・量ともに充実してきている。

前回の行動分析学会第11回大会において、「言語行動の機能化・般化・自発性」と題したワークショップ（企画者：伏見貴夫氏）が開催されたが、ここで討論された内容は、①日常生活場面における言語行動の制御変数の同定、②そのための観察データの蓄積、③実験的行動分析による言語行動の“機能化”についての再構成などの必要性が指摘された。これらをふまえて、言語行動の機能化を促進するための方法論の構築をめざして、いかにして実証的なデータを提出していくかが今後の課題とされた。

そして、基礎的・実験的アプローチの必要性としては、①実験室や訓練室で得られた知見は日常場面のあるべき環境を先取りしたものである（望月，1993）から、環境場面の不備を指摘する材料となる、②障害児への指導方法の確立や貢献とともに、単に有意義な治療技法を生み出すだけではなく、人間の行動の理論の基礎を構成する（ホーナー・ダンラップ・ケーゲル，1992）ことがあげられている。

一方、障害児の言語行動に関する臨床的研究、実験的・基礎的研究、および理論的研究とが分離している現実もある。それぞれのアプローチに対しては、以下のようなことが指摘されている。①実験室や訓練室で形成された行動が、日常場面で般化しないことが多い。②臨床場面での研究は、明確な方法論のもとでの行動の相関分析や因果分析がなされていない。③実験的研究と臨床的研究を包括するための理論的研究がきわめて少ない。

このような指摘に対して、基礎的な研究からアプローチする者としては、実験場面で得られた知見の日常場面への汎用化の限界、日常場면을シミュレート化した実験場面における環境刺

激設定の限界などの問題点を解決していく必要がある。

また、障害児の教育現場や実践現場での直接的な訓練や指導だけでは、指導方法や技法の洗練化には限界あるだろうし、訓練や指導の効率性からいってもある程度の汎用化に耐えられる指導方法や技法の開発が望まれるところである。

そこで、今回のワークショップでは、実験室的に障害児のコミュニケーション行動の成立条件を明らかにする目的で研究を進めている2名の話題提供者より、実験的研究により得られた結果、およびその臨床的意義や理論的展望を語ってもらう。報告された実験的研究を足がかりにして、フロアーからの活発な発言を期待しながら、このようなアプローチの貢献度、その成果、方法論についての課題について検討していきたい。その際に、理論的な背景をもう一度確認し、伏見ら（1993）が提案したような言語行動の機能化・般化・自発性といった観点からも検討していきたい。

〔参考文献〕

伏見貴夫・野呂文行・加藤哲文（1993）：言語行動の機能化・般化・自発性，日本行動分析学会第11回大会発表論文集，7-8。

ホーナー・ダンラップ・ケーゲル（1992）：自閉症、発達障害者の社会参加をめざして，応用行動分析学からのアプローチ，小林重雄・加藤哲文 監訳，二瓶社。

望月 昭（1993）：精神遅滞児の教育臨床における実験心理学の応用，小宮三弥・山内光哉 編著，精神遅滞児の心理学，川島書店，Pp.197-207。

〔謝辞〕

本ワークショップの企画に際して、山本淳一氏（明星大学）よりコメントをいただいた。ここに謝意を表する。